

1、筑紫と大宰府、及び鴻臚館の略史

中国・朝鮮半島への窓口であった筑紫は、記紀・万葉の時代から数々の伝説や歌の舞台となった。「筑紫」は、古典文学では、肥前・肥後・豊前を含む九州北部地域の称として広義で使用されることが多いが、この筑紫及び九州一円の政治的中心が「遠の朝廷」と称された大宰府であった。

大宰府の正確な設置時期は不明であるが、推古天皇十七（六〇九）年に筑紫大宰から百濟僧らの肥後国への来着が奏上されたのが、記録上の初見という。やがて天智二（六六三）年、日本・百濟連合軍が白村江の戦いで唐・新羅軍に大敗し、大宰府を守るための水城と大野城が築かれた。そして壬申の乱を経て藤原京時代にかけて、大宰府の拡充と組織確立のさまが記録に窺える。次いで八世紀初め、掘立柱の建造物から瓦屋根の朝堂院型式の建物へと建て替えられ、九州における行政組織の中心として、今日遺る政庁跡（都府楼跡）に見られるような形に整えられたのである。しかし、その後の大宰府は、軍事的性格から外交・行政のための組織へと転化したこと、朝鮮半島の情勢等から、政治的重要度は次第に低下する。それでも万葉集に筑紫を舞台に詠まれた多くの歌を残し、文化的に大宰府が最も隆盛を誇ったのが奈良時代である。

平安京遷都以後も大宰府は維持された。しかし、博多湾に望む丘陵地（福岡城址の一角、平和台球場跡地）にあった外

交用施設（出入国の直接窓口）「筑紫館」が、「鴻臚館」と名称を改められ（記録の初見は承和五（八三八）年）、ここが新羅や唐との貿易拠点となる頃、律令体制の緩みと「王朝国家」体制への変質によって、大宰府は主として在地の官人らによって運営される状況に至る。長官・帥は赴任しなくなり、権帥や大貳として赴任した人物がトップに立つ、それも菅原道真の例の如く、中央から左遷された人物で実働的な働きを求められないうことも起こるのである。天慶四（九四一）年には叛乱者・藤原純友によって一時占拠され官衙も焼かれたが、乱平定後には再建された。また、その以前から、鴻臚館とその付近に置かれた警固所に、博多津防備のための武器や兵が大宰府から移し配されていたが、寛仁三（一〇一九）年四月、女真人の海賊の一団が襲来、時の権帥藤原隆家以下の府官及び在地の豪族らが防戦し、多数の犠牲を出しながらも賊を撤退させることに成功した。所謂「刀伊の入寇」である。この後、永承二（一〇四七）年、鴻臚館が放火によって失われるという事件が起こった。犯人は捕縛されたが、鴻臚館は再建されることがなかったらしい（鴻臚館跡では十一世紀後半期の遺構及び出土品が無い）。大宰府は平安時代末まで存続したが（いつまで存続したかは正確

には不明)、鎌倉武士政権とその支配の確立の中で組織としての働きを失い、次第に「権威」としての存在になったようである。

## 2、平安時代の歌に見える博多と大宰府周辺

筑紫関連の和歌は記紀歌謡や『万葉集』以来多数あり、いわゆる筑紫の歌枕も少なくないが、今回は平安時代、それも博多周辺と大宰府関連の歌に絞って収集・調査し、歌に詠まれた場所の踏査を試みた。

実際のところ、平安時代の歌で筑紫と関連するものは、その多くが大宰府と博多周辺で詠まれた歌か、大宰府と博多周辺の地名(歌枕)を詠んだものである。これは遺された歌が、基本的に、大宰権帥や大貳、筑紫諸国の守として下向した貴族とその関係者のものだからである。例えば、

つくしにてたがはのみかどに、ぼだいずたてまつりあげらるるに

みがくらん玉の光をたのむかなかずにもあらぬたてしがはらを  
(元輔集・二五六)

府にいるひ、みづきのせきに、少貳府官などむかへにあつまりきたり

いはかきのみづきのせきにむれむかふうちのころもしらぬもろ人  
(高遠集・一八二)

そめかは

守、藤原高遠は大宰大貳、源道済と藤原経衡は筑前守)、下向・上京の途次や筑紫における生活の中で詠まれた歌の例である。特に高遠集は筑紫関連歌が多く、ここに示したのはごく一部である。また、

つくしにひぜんといふところより、ふみおこせたるを、いとはるかなるところにて見けり、その返ごとに

あひ見むとおもふころはまつらなるかがみのかみやそらにみるらむ  
(紫式部集・一八)

かへし、又のとしもてきたり

ゆきめぐりあふをまつらのかがみにはたれをかけついのるとかしる  
(同・一九)

前斎院の御さうそうに、その夜、かかることを、つくしへくだりにし御めのとのむまごはしらじかしと思ひしにあはれにて、そのひとをしりたる人にやりし

もえはつるけぶりをしらでかまどやまよその空なるくもとみるらん  
(赤染衛門集・五八四)

わづらはしきゆかりある人の、ふみおこせつつひさしうなりぬるに、返ごともせぬに、大二になりてくだるとて

よしやいはじありへてみてむつくしなるいきのまつばらいきしめぐらば  
(四条宮下野集・三三三)

こひしさは色にいでぬと染かはのころをくみて人しらなむ  
(同・一八六)

きのまろどのといふやはつくしにありけるむかしよりきのまろどのときこえしはすみつく人のなきなりけり  
(同・一八七)

筑前国にて、香椎宮の祭のひ、梅花をさしてよめる、国の例にて春は梅、冬はすぎをさして、前前の守もかならず歌よめり

としごとにほひまされるむめのはなおなじろにてすぎをかざさん  
(道済集・三二八)

色かへぬときはのすぎはわぐにのながけきみやのしるしなりけり  
(同・三一九)

日のいたく तरीはべりしに、かまどの明神に、むまかがみなどたてまつるとて

あめふれといのるしるしのみえたらばみづかがみともおもふべきかな  
(経衡集・一三九)

またなりたる大貳、心よからず思ひたるなどききしかば、むつかしうて、はこぎきにまうでて

またふたつたのむかたなき我が身かなあけくれはただはこぎきのみや  
(同・一四〇)

だいにときしげ

はこぎきのみことのりぞとこれをしれくにごこのつかみてしと見ん  
(同・一四一)

は、作者がすべて実際に下向した人々であり(清原元輔は肥後

くるしきに思ひながらぞはるかなる心つくしにいきのまつばら  
(同・三四)

つくしにはいきのまつばらありとききて

おとにきくいきのまつばらなにしおはゆきかふ人もよろづよぞへん  
(成尋阿闍梨母集・一六)

かまどやまといふところもあんなれば

おもひやるころをしらばかまどやまはるけきみちもてりぞわたらん  
(同・一七)

は、いずれも女性の歌であるが、親しい人などが筑紫に下り、その関連で詠まれた歌である。女房歌人では、彰子に仕えた伊勢大輔が自ら筑紫に下った経験を持ち、後に娘の康資王母も筑紫に下っている。

つくしの道に、つねしといふ所にあまのいへよりけぶりのたちしかば

あきはきりはるはかすみにたちまじりしほやくけぶりつねしと思ふ  
(伊勢大輔集・一〇三)

むすめのつくしにくだり侍りしに

ちとせまでいきのまつばらいきて身をこころつくしに恋ひやわたらん  
(同・一〇四)

かへし

いきのまついきても君にあふ事のひさしくならむほどをこそ思へ  
(同・一〇五)

また、高名な大貳三位も筑紫に下った経験を持つ。のちのたびつくしにまかりしに、もじの関のなみの

あらうたてば

ゆきとてもおもなれにけるふなみちにおきのしらなみこ  
ころしてこせ (大式三位集・三六)

つくしにて、さわらびといふ題を

かまどやまふりつむゆきもむらぎえていまさわらびもも  
えやしぬらん (同・三七)

以上の歌は十世紀から十一世紀後半にかけての、いわゆる院政  
開始頃までの歌であるが、これらの歌に最も多く登場する地名  
は「生きの松原」であり、次いで「竈山」「竈明神」が複数見  
られ、その他筑紫に下向した人の歌では「香椎宮」「箱崎宮」  
「染川」等が詠まれている。「松浦山」や「(松浦の)鏡」は  
伝承として知られていたと思われるが、院政前期頃までの歌に  
はあまり詠まれてはいない。この他、ここには取り上げなかつ  
た歌には「四王寺山」も複数見られる。

また、筑紫関連の和歌資料としては『檜垣嬬集』もあり、こ  
こに具体的に述べられる筑紫の生活や地名等には興味深い点が  
少なくない。

いとこのほりに、ものいひし下らうの、心かはりて  
めまうけて、そこにすみつきて、いとたまさかにお  
とづれぬに、ただならむやはとて、おなじさまの人  
のみゆるに、いづちぞといへば、いとへぞ、ことづ  
てやあるとたはぶるに、このとしごろは、いとし  
まのこほりとぞいふかし

いとしまにかけてとぶとりまでやとりをにもはねにもこ

### 3、院政期の筑紫を求めて①—福岡市とその周辺

筑紫に関係した和歌に最も多く詠まれた「生きの松原」は、  
旧糸島郡、現在の福岡市今宿にあり、福岡市営地下鉄空港線の  
終点姪浜の西、JR筑肥線下山門駅の北に生きの松原保存林が  
ある。現在の海岸線と松林からは県道を挟んで十メートル余り  
南側に後退した場所に保存緑地帯が設けられており、大きくは  
ないが由緒ある香岐神社の社も存する。この辺りが古の「生き  
の松原」の名残であるらしいのだが、この保存林には大きな松  
はほとんど無いので、大木も見える現在の浜辺の松林のほうが、  
歌枕に似つかわしい風情に見えてしまう。ここは正面に能古島  
を望み、左右が北に張り出した形で湾曲した美しい海岸である  
が、前章に示した『高遠集』には、任果て上京の折にこの松原  
を詠んだ歌がある。

いきのまつばらをすぐとて

おとにきくいきの松原見つるよりもおもひもなきこ

ちこそすれ

(高遠集・二〇三)

これは博多湾を行く船から松原が見えた様を言うのであろうが、  
船が博多の津を出て北西に進み、能古島の北を通った場合(今  
日の渡船やフェリーの一般的航路)には、地形から見て、この  
松原は見えにくいように思われる。或いは生きの松原は今日の  
それよりもっと東側(姪浜側)にまで延びていたものか、又は  
博多湾を出てゆく航路が少し異なったのだろうか。そんなこと  
も考えさせられる場所であつた。

とづたへせむ

とらのかはのしりぎやをだいにて、ひごのかみよま  
せしに (檜垣嬬集・七)

うみへとてゆくみなとらのかはのしりさやけからぬはな  
みのにごすか (同・八)

かすひの宮のまつりのつかひにさされていづるを、  
そのうたよむべかなり、さることあらばいかげむ  
とて、わざとこひにたづねきて、をりはしらず、た  
だつかひつべからむうたひとつといひたるに、だい  
もなければ、ただおもひやりに  
ちはやぶるかすひのみやのあやすぎはいくよかかみのみ  
そぎなるらむ (同・一四)

七番歌詞書中の「いとこのほり(怡土郡)」は、『魏志』倭人  
伝の伊都国に比定される場所で、鴻臚館の軍備が強められる以  
前、外戎防備の拠点であつた地域である。また八番歌の「虎の  
皮の尻鞆」は後章に紹介する『散木奇歌集』に見える「虎の皮  
の下鞍」に通じるものがあるし、一四番歌の「香椎宮の祭」で  
歌を捧げる話は、前掲『道濟集』三二八・三一九番の内容と重  
なっている。

以上の資料や事実から、今回のフィールドワークでは、大宰  
府官衙跡、鴻臚館跡のほかに、生きの松原、香椎宮、筥崎宮、  
竈神社等を実際に踏査して、平安時代院政期の頃の筑紫の姿を  
求めるよすがとした。

香椎宮は博多から海の中道方面へ向かう途中に位置し、博多  
駅からはJR本線及び香椎線、天神や中州からは地下鉄箱崎線  
終点・貝塚駅から西鉄線で行く。西鉄香椎宮前駅からは南へ約  
一キロメートル、JR香椎神宮駅からは約四百メートル、参道  
の左右に楠の大木が続き、蛇行する道の形が古来の地形を偲ば  
せる。本殿前に池のある空間が広がり、かつての威容を遺すも  
の、現在はずっかり新興住宅地に囲まれて、香椎宮とその背  
後の森の辺りだけが昔のままに残されたように感じられる。  
香椎造と呼ばれる本殿は楼門を経て二度上った小高い場所にあ  
り、手前に神木の綾杉がある。本殿の右奥に続く小道を行くと  
仲哀天皇・神功皇后の櫓日行宮跡に出、その丘陵下、西北に百  
メートル余り行った所に「不老水」と呼ばれる伝説の名水が湧  
いていた。

もう一つの神宮、筥崎宮は、地下鉄箱崎宮前駅が近い。中州  
川端から地下鉄箱崎線の四つ先で、駅東南の出口から地上に出  
ると、正面に堂々たる楼門が見えている。繁華街に近く、地理  
的条件で香椎宮よりも恵まれているためか、観光客や参拝者は  
平日でも比較的多いようである。境内も広いが、楼門から北西  
の海岸線に向かって、非常に幅広い一直線の参道が延びて、こ  
の宮の威風堂々とした印象を一層強めている。現在は海岸線が  
高速道路(都市高速1号線)の高架下付近で、楼門からは一キ  
ロメートル以上離れているが、恐らく昔はもう少し浜に近い形  
であつたのではないだろうか。香椎宮は海岸より内陸に少し入  
った田園地帯に鎮座していたと想像されるが、筥崎宮は博多の

津に出入りする船からも見える場所であつたと思われる。

香椎・宮崎両宮はともに重んじられ、国司や大宰府の官人が参拝したらしいことは、前章で示した『道濟集』『経衡集』及び『檜垣姫集』の歌にも見えているが、院政期に入っても『康資王母集』に、大江匡房との次の贈答が見える。

まさふさの帥のふたたびなりたるよろこびに

かくしあらば千年のかずもそひぬらん二たびみつる箱崎の松  
(康資王母集・一四二)

かへし

はこ崎の松に千年のしるければふたたびのみか三たびこそみめ  
(同・一四四)

匡房の大宰権帥再任は長治三(一一〇六)年三月一日であるので、贈答はその折のものと思われるが、匡房の集『江帥集』にはこの歌は見えない。

また、これよりも十年近く早いと思われる歌で、香椎・宮崎両宮に関わる少し面白い歌が、『散木奇歌集』にある。

つくしよりのぼりけるに、はかたといふ所に日ごろ侍りけるに、箱ざきの神主のりしげと香椎の神主よりもちとまできて、ともにうれふることありてたがひに論じゐたるをききて、この事いかにもいはんにしたがふべくはさだめんと申せば、ともかくもいはんにしたがはんと申しけるを聞きてよめる

はこ崎の松はまことのみどりにてかしひの方もつみはきこえず  
(散木奇歌集・七六四)

古の禅寺である聖福寺などがある。

地下鉄祇園駅を東側に出た正面にあるのが東長寺で、本堂や大仏殿など伽藍も大きい。境内で遊ぶ幼子とその母、階で日向ぼっこする老人と昼休みのサラリーマン風男性などの姿も相俟って、明るく伸びやかな気配が漂う寺であつた。境内北側の堂の前に、空海が滞在し、最初に密教をもたらしただ地であることを語る「密教東漸最初之霊場」の碑が立っている。一方、東長寺の北東にある聖福寺は、一般の立ち入りを許しているのが手前(西南)の三分の一程度、白い塀の向こうに薨の波を覗かせていて、寺域の広さにまず驚かされる。更には、重要文化財の三門や大雄宝殿等、建造物の荘重な美、周囲のかっちり区画された緑豊かな庭、その庭がまた完全なまでに清められて静謐を保っている。四角いビルが林立する現代都市の一角に、非常に厳肅な異空間を作り出している寺であつた。この二寺のほかにも寺々の屋根と門がずらりと並ぶ御供所町は、御笠川の東岸であり、ここから川に沿うように南に下れば、やがて四王寺山(大野城跡)の西を通って大宰府に至る。筑前の国府は四王寺山西側(大野城市)にあつたと推測されている。

ところで、源経信・俊頼父子に数年先行して筑紫に下った人物に、女流歌人の肥後がいる。時の摂政藤原実家に仕えた女房で、夫藤原実宗の肥後守赴任に同行したのであるが、家集『肥後集』に次のような歌が見える。

つくしにかすがのおはします宮しろのまへに、ふぢのはなさきたるをみて

興じておのおのたちにけるとぞ

源俊頼は、大宰権帥となつた父経信に従つて、嘉保二(一一〇九五)年に筑紫に下り、承徳元(一一〇九七)年閏正月、父を大宰府で看取り、同年夏に帰京した。『散木奇歌集』では、筑紫関係歌が巻五旅宿部と巻六悲歎部の両方に見えており、右の歌は旅宿部にある。上京時に博多に数日滞在していたのは、経信没後のことかと思われるが、悲歎部に入らず旅宿部に配したのは、父を失つた悲歎の心を詠んだものではないためだろうか。香椎・宮崎両宮の神主が言い争うのを歌で仲裁した形で、どちらも正しいよと慰めて体よく二人を追い払った感がある。

同集の悲歎部には同じ博多で唐人の弔問を受けた折の気持ち詠んだ歌も見える。

はかたにはべりける唐人どもの、あまたまうで来てとむらひけるによめる

たらちねにわかれぬる身はから人のこととふさへぞ此世にもにぬ  
(散木奇歌集・七八七)

博多にはこの頃多数の唐人(宋人)が定住して、貿易に従事していたと言う。鴻臚館が放火で失われても再建されずに終わつたらしいのは、定住した宋の商人らの活動で、鴻臚館の外交・交易の窓口としての役割が終焉を迎えていたためと推測されている。成尋阿闍梨ら、中国に渡る僧の渡航を助けたのもそうした商人であつたが、彼らが定住していたのが、JR博多駅の西北、地下鉄空港線東側にある御供所町一帯と言われる。ここには、空海が唐から帰国直後に開いた東長寺、栄西による日本最

ふぢのはないかなるものちぎりにてさかゆるすゑのこ  
だかあるらん  
(肥後集・一三三)

ここに言う「春日のおはします御社」とは、博多の津から南下して筑前国府に至る中程、現在の春日市春日一丁目の春日神社と思われる。この神社は、対新羅戦のために遷幸した中大兄皇子がここに天児屋根命を祀つたことに始まり、神護景雲二(七六八)年、時の大宰大貳藤原田麿が参拝し、更に春日大社から武甕槌命以下の三神をも勧請して創建したと伝えている。JR鹿児島本線春日駅の西南、広い春日公園を経て旧来の住宅地に入つたバス通り沿いに、神社はある。よく見るとバスの通る県道が境内を二分した形になっており、道路西側の奥、少し上つた所に社殿や若宮社などがあり、道路東側に池と楠の太木から成る神苑の名残がある。楠の太木は西側にも多く見られ、根元の絡んだ五本には注連縄が巻かれ、傍らに春日市教育委員会による「天然記念物 春日の杜」の説明板もある。しかし、特筆すべきは、社殿右前と県道脇との二箇所にある、藤の古株が脇に配された楠の太木の姿である。藤蔓が楠に複雑に絡んでともに天高く延び、非常に木高い藤棚を造っているのだ。樹齢がどの程度で、いつ頃からこの形で存するものか、定かではない(説明板にも楠の樹齢は記されていない)のだが、見た瞬間に肥後の詠んだ「栄ゆる末の木高」い藤の花とはこのようなものではなかつたか、という気持ちが湧いた。いつか又、藤の盛りに確かめに行きたい場所である。

なお、福岡市内の史跡として、たびたび言及した鴻臚館跡は、

奈良平安の時代の筑紫を知るためには重要な場所である。福岡城内の平和台跡地に所在するが、福岡城趾公園の案内板が不親切極まりない上に、現在では遺跡の大部分がフェンスに囲われているため、遺構を保存した場所があることを知っていて、必ずそこへ行こうという意志を持たない限り、なかなか行き着ける状態ではなかった。フェンスの奥に、遺構の一部を奈良時代風の屋舎で覆った展示館があり、内部には壁に沿って出土品展示や分かり易い解説板もある。地下鉄空港線を赤坂駅で降り、明治通りを西に進んで、裁判所右側の道を入って行くとたどり着き易い。一九八八年から始まった鴻臚館跡の調査は、二十年を経て大きな成果が出ており、奈良時代の筑紫館から平安時代の鴻臚館に至る具体的な姿が見えてきているが、今後も全容解明を目指した調査が進められると言う。本丸跡の梅園下に宝箱が隠れている、そんな場所である。

#### 4、院政期頃の筑紫を求めて②―太宰府市とその周辺

2章で触れたように、平安期の筑紫関係の歌は大宰府における生活が反映されたものが多い。よく詠まれる地名（歌枕）に「竈山」「四王寺山」「染川」があるのは、それらが太宰府に所在し、馴染み深い山川だからである。

つくしへまかりける時に、かまど山のもとにやどり  
て侍りけるに、みちづらに侍りける木にふるくかき  
つけて侍りける

つかっているが、今回は山登りをする時間的余裕もないので、竈門神社に詣で、社殿下の台地状の場所に平安時代後期の僧坊址を確認するにとどめた。『後拾遺集』夏に、

つくしの大山寺といふところにてうたあはせしはべ  
りけるによめる  
元慶法師

わがやどのかきねなすぎそほととぎすいづれのさともお  
なじうの花  
（後拾遺集・一七八）

という歌があるが、歌合の行われた「筑紫の大山寺」とは竈門神社の神宮寺であつたらしい。初め竈門寺、のち大山寺と称し、平安後期に延暦寺の末寺となったという。大宰府の鬼門にあたる山であり、官人らが朝夕に眺め、神社にも寺にも参詣が多かつたことは想像に難くない。

一方、四王寺山も大宰府官庁群の背景にある山（標高四一〇メートル。大城山、大野山、鼓ヶ峰、岩屋山の四つの総称）であつて、どこからでも眺められ、時間に余裕さえあれば気楽にハイキングも出来る山である。この山の西北辺りに筑前国府があつたらしく、南西には水城が築かれて、南側台地に大宰府官衙群が建ち並んでいたのであつた。山名は、七世紀に外敵から大宰府を守るため、山頂に四天王を配した朝鮮式山城（大野城）を築いたことに由来する。太宰府天満宮は山の東端麓に位置する。

染川は、中世に藍染川と呼ばれ謡曲にも登場する川と同一と言われるが、今日では竈・四王寺の二山に比べて影が薄く、所在の掴みにくい川になってしまっている。太宰府市の地図を見

春はもえ秋はこがるるかまど山

もとすけ

かすみもきりもけふりとぞ見る（拾遺集・一一八〇）

つくしに、四王じ山といふところ、いとよみにくき

だいなるといひけるをききて

おいぬともさしかくしてもあるべきにしわうしやまづか  
ほにたまれば  
（仲文集・七九）

つくしへまかりにし女の、ほどもなくをどこしては  
べるとききてつかはす

そめかはとききしもしるくわたりける人の心もいろめき  
ぬとか  
（能宣集・二〇）

『拾遺集』一一八〇番には異伝もあり、『重之集』（二番）にも、『俊頼髓脳』にも見えている。また四王寺山を詠んだ歌も、『檜垣姫集』（一二番）に発想のよく似た歌があり、染川も男女関係に絡めて詠まれた例が他にも数首ある。

竈山は、太宰府市の北東にある標高八三〇メートルの山で、今日は宝満山と呼ばれている。西鉄線太宰府駅前からバスで十五分程度（コミュニティバスまほろば号、料金百円）で麓の神社前（登山口でもある）まで行くことが出来る。郊外の山里と言つてよい場所だが、その割にはバスも比較的ある。麓の竈門神社も、「竈山」の名も、九合目付近にある竈門岩（三つの岩が鼎立したもの）と関わるようである（鼎立した三石を祀ることは沖繩のウタキの祭祀がよく知られており、奈良の三輪山なども三つの岩を磐座とする）。この山は古い祭祀遺跡が多く見

ると、北から御笠川が四王寺山の西を経て、大宰府政庁群の南側を巡るように流れ、天満宮の奥へと続く。また、御笠川の南西を流れる別の川などもあるが、それらの観光用地図に載る川はみな染川ではないのである。天満宮の南に光明禅寺があるが、この寺の北側の道路に沿って側溝のように見える小川が、寺の西で蛇行する流れになる、これが染川であつた。川幅の割には、清冽な水が割合豊かに走っている。川は時代によつて川幅も流れも変化することが多いが、この川もかつてはもつと大きな流れで、大宰府に暮らす人々の暮らしと密接に関わっていたのであろう。今回は時間が不足して、水源も流れの末も確認出来なかつたので、これもしずれ機会を得て追究してみたいものである。

さて大宰府の暮らしであるが、赴任した歌人が都を偲びつつ、眼前の風物や所の名を歌に詠みなどして心を慰めていた様子は『高遠集』等からも窺える。

つくしにくだりついしとしの九月に、菊のはなをみ  
て

なつかしく袖にもふれん花のかをいつまでよそにをらん  
とすらん  
（高遠集・一五七）

三月三日安楽寺花宴日、僧都元真のもとにいひやり

し

みちとせにはなさくものけふごとにあひくるきみをた  
めしにぞみる  
返し  
（同・一七五）

ここの空けふやかぎりとおもふ身をきみがいのりにおなじくやへむ  
(同・一七六)

菊の歌は上京の折にも詠まれている。

いまはとて、はかたにくだるひ、たちのきくの、おもしろかりしを見て

とりわきて我が身につゆやおきつらんはなよりさきにまづぞうつろふ  
(高遠集・二〇二)

かへし、監明範朝臣

いまはとてうつろふきみをしのべばやはなのたもとも露けかるらん  
(同・二〇二)

安楽寺の僧へ歌を贈る場面は『経信集』にも見えている。

往年参安楽寺聖廟、望砌下梅花、紅艶香気差勝衆花、今臨暮年又对此花、花貌雖同已為老樹、仍不堪情感、

懋詠蕪詞奉呈別当阿闍梨に

かみがきにむかしわが見しむめのはなにもにおいきなりにけるかな  
(経信集・一〇)

昔筑紫にて、秋野にて

はな見にとひとやりならぬ野べにきてこころのかぎりつくしつるかな  
(同・九六)

安楽寺は現在の天満宮の地にあった寺で、延喜五(九〇五)年、道真の廟所に創建され、大宰府官人の信仰を集めて堂宇が整えられて行ったという。ここでは曲水宴、七夕宴、残菊宴などの詩筵も催されたと言うから、高遠や経信、後述する匡房らは当然これに加わったことであろう。

一方、『散木奇歌集』には風流ばかりではなく、在地における人との交流や実生活が偲ばれる歌があつて、興味深い。

つくしに侍りけるころ、肥後守盛房が劍身のよきありたまはんと申しけるが、おともせざりければ、いかにかと尋ねけるに、忘れにけりと申すを聞きてよめる

なきかげにかけけるたちもあるものをさやつかのまに忘れはてける  
(散木奇歌集・二三四三)

つくしにはべりけるころ、すずくらにほしひのありけるをみて 有僧

すずくらにふるきほしひぞつきもせぬ

人のかたりけるをききて

たが領領にならむとすらん  
(同・一六一八)

また、大宰府の南に今も続く温泉、吹田の湯(『万葉集』にも登場する、現在の二日市温泉)のことが同集悲嘆部に見えており(『俊頼随脳』にも『拾遺集』一一八〇番歌のことで名が見える)、彼らが折々にここで湯を浴びたことが想像される。

わざの事はててかへりけるに、すいたのゆのむかひにありければたちよりてあみんとはなけれども、あしなどすずぎけるついでによめる

かなしさの涙もともにわかかへるゆゆしきことをあみてこそくれ  
(散木奇歌集・七八二)

二日市温泉は、JR鹿児島本線二日市駅から徒歩十五分弱、温泉の銭湯(御前湯)や日帰り温泉施設(博多湯)を中心に、他

に十軒ほどの温泉宿がある。湯は幾分黄色味を帯び、微かな硫黄系の臭いも感じられるが、柔らかくさらりとしていてよく温まる。『古今集』離別(三八七く三八九番)に、源実が

「筑紫へ湯あむとて」旅立った折の歌があり、これは吹田の湯へ行ったのではないかと注が一般的であるが、確かに大宰府からもほど近い場所であり、官人等の湯治も十分考えられよう。

ところで、経信・俊頼父子と相前後して二度大宰府に下向した大江匡房は、前述の安楽寺内に一院を建立し、天仁元(一一〇九)年には大般若経供養を行ったという。

廟前桃花、安楽寺宴

みづがきにくれなみにほふものはなひかりもいとどまされとぞおもふ  
(江帥集・四五)

は、安楽寺における宴の場で詠まれたことが明確な一首。『江帥集』には、「於大宰府詠之」「つくしにて」等とあって、大宰府で詠んだと見られる歌が、全部で十一首(長歌含む)ほどある。

於大宰府思京洛間、聞雁

たまづさをかへるかりにもつくべきにきたへゆくこそかひなかりけれ  
(同・一七二)

は望郷の念を抱きながらの生活の実感がある。また、

つくしにて、さ月まであめふらぬに、かたがたいのりしてのち

さなへとるみづをひきひきまかせつつあはれたのしきあめのしたかな  
(同・三七五)

には、雨乞いの祈りを諸方で行った後、自らも言霊による験を得ようとの思いで詠まれたものであろう。祈祷を行った場所には竈山なども含まれていたのではないかと。

あか月のやまのゆき、つくしにて

かまどやまたたよをこめてふりつもるみねのしらゆきあけてこそみめ  
(同・一四二)

これらの歌は、初任時か再任時かがほとんど不明であるが、それでも匡房は筑紫における具体的な生活の様子を比較的多く歌に遺したと言える。

最後に、筑紫へ下向した人々は、帰京すると革製品の土産物等を期待されたいことに触れる。『兼澄集』に、

つくしよりきたりしひとにくるまのすだれがはこふに、いまといへば

ありとのみ人のいふめるそめかははこころづくしにこひやわたらん  
(兼澄集・二二)

とあって、簾に用いる革に染川を掛けて、糞う心を詠んでいる。また、『散木奇歌集』にも、

つくしよりのぼりける比、式部大輔正家が子の俊信が、ごけいの前駆しけるれうにとらのかはのしたぐらやあるとたづねたりけるにそへてつかはしけるこまなめてかりする人はからくらのとらふすのべぞゆかしかりける  
(散木奇歌集・一三七一)

さやうによきはなかりければえつかはさでよめるとらふせるこのしたくらくなりぬればかりゆることもか



たきなりけり

(同・一二七二)

と見え、筑紫からの帰京者ならばよい革製品を持っているとあてにされていることが窺われる。これは博多の商人らとの接触などで、中国や朝鮮半島の良い品が手に入りやすいことがあったためであろう。2章で『檜垣姫集』にある「虎の皮の尻鞆」題の歌を挙げたが、それも筑紫における交易で様々な革製品の存在があったことを物語るであろう。そういえば、直ちに筑紫と関連づけることは無理があるろうが、『肥後集』に、

こひうたをものによせつつよみにしに

わがせこがさげはくたちのさめざめとつかのまもなくねこそなかるれ

(肥後集・一九二)

と、太刀の鞘(又は柄)の絞皮が詠まれている。この時代は、このような珍しい物の名を詠み込む遊戯的な歌が流行でもあったが、或いは肥後もまた、筑紫土産にそのような品を持参したりした可能性も零ではなからう。

以上、福岡・太宰府周辺におけるフィールドワークの成果として、事前調査資料と現地での見聞、及び現地で収集した資料を用いて、旅の報告と称する駄文を綴ってみた。わづかでも今後この方面に行かれる際の参考になれば幸いである。

文中の和歌の引用は全て『新編国歌大観』による。大宰府(官)と太宰府市(地名)とは書き分けをした。

料に基づく記述もあるので、主たる参考文献名を示して置く。

☆久松潜一ほか校注『平安鎌倉私家集』日本古典文学大系80 (岩波書店)

☆新日本古典文学大系5『古今和歌集』

11『新古今和歌集』(岩波書店)

☆福岡市教育委員会『史跡 鴻臚館跡』

☆森弘子監修『目でみる大宰府』(古都大宰府保存協会)

☆『特別史跡 水城跡』(古都大宰府保存協会)

☆『都府楼』24号「特集・能舞台筑紫路」(同右)

☆『都府楼』39号「特集・宝満山」(同右)

☆『春日神社略記』(春日神社社務所)

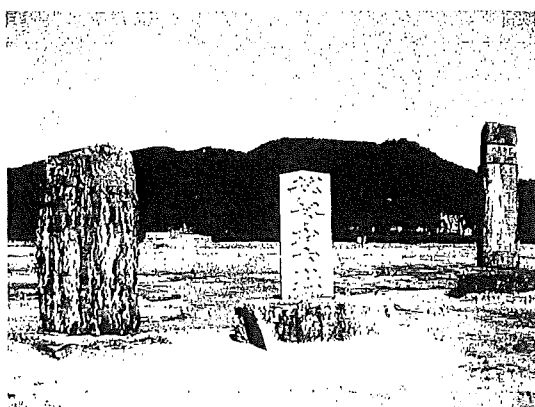
☆『香椎宮御由緒』(香椎宮社務所)

☆『平安時代史事典』(古代学協会・同研究所編 角川書店)

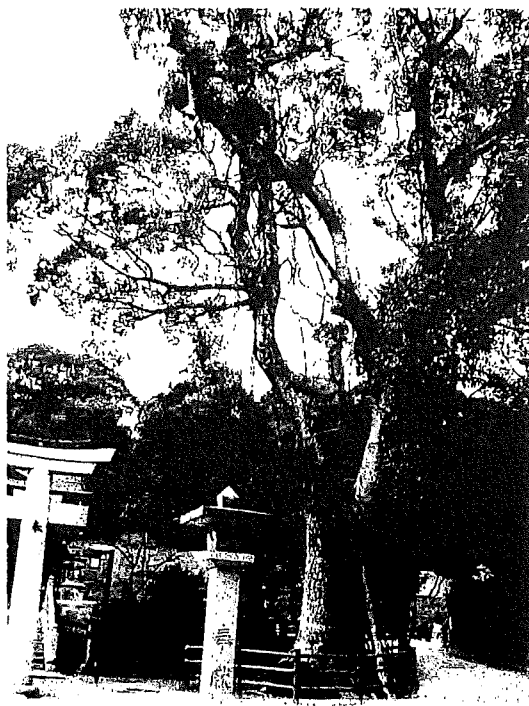
☆『歩く地図 九州』(山と溪谷社 二〇〇七年三月)

☆『筑紫名所繪圖』(筑紫管内商工会編集)

◎旅行実施日 平成二十年二月四日～六日



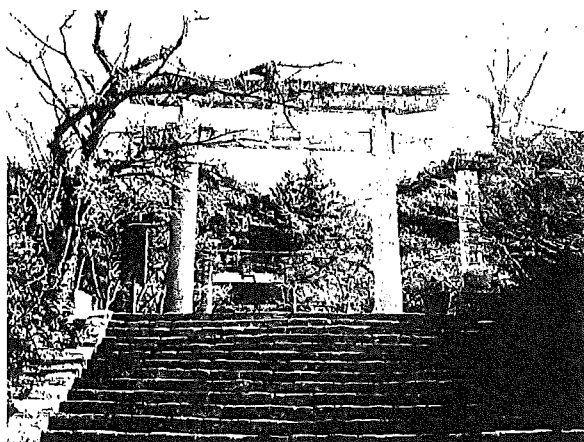
大宰府政庁跡(背後の山が四王寺山)



春日市春日神社の大樟  
(藤が右からのびて複雑に絡まる。  
昨年の台風で、左側の大枝が折れ、藤棚状態がかなり損なわれた)



美しい「生の松原」の海岸  
(松原は背後。正面に見えるのは湾曲した部分)



宝満山(龜山)龜神社入り口  
(奥の鳥居の右辺に平安時代の僧坊址がある)



光明禅寺前の藍染川  
(小さいが清冽な水が走る)